

第69回 文化講座

発掘調査速報 2017 その1

【日 時】 平成 29 年 8 月 5 日 (土) 13:30 ~ 16:00

【会 場】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

沖縄県立埋蔵文化財センター

第69回文化講座「発掘調査速報 2017」

平成 29 年 8 月 5 日(土) 13:30 ~ 16:00

開催あいさつ 沖縄県立埋蔵文化財センター所長 金城 魁信

「円覚寺跡」 金城 貴子 … 1

「県営首里城公園内 中城御殿跡」 田村 薫 … 5

休 魏

「旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区」 南 勇輔 …11

円覚寺跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

主任 金城 貴子

事業名：円覚寺跡発掘調査 所在地：那覇市首里当蔵2-1

時代：グスク時代～近代 調査期間：平成28（2016）年7月1日～9月26日

調査内容：円覚寺跡三門復元整備に向けた遺構確認調査

1.はじめに

円覚寺とは1492年から約3年の歳月を経て建造された臨済宗の寺院です。その創建については、尚真王（第二尚氏王統第三代）が父親である尚円王の御靈^{みたま}を祀^{まつ}るために建立されたと伝えられています。現在、国の史跡に指定されています。

2.これまでの経過

円覚寺の境内に存在した建造物は、沖縄戦によって焼失しましたが、往時の姿を復元することを目的に、平成9年から平成13年までの5か年間、遺構確認調査を実施しました。その調査成果などに基づき、翌年から円覚寺跡の外周を取り囲む石牆^{せきしやう}の復元整備が実施されました。平成19年度からは、前回未調査部分の遺構調査に着手し、その成果をうけて現在も引き続き復元整備事業が行われています。

3.平成28年度の調査成果

平成28年度の調査は、かつて存在した三門の復元整備に向けた遺構確認を目的として、発掘調査を実施しました。

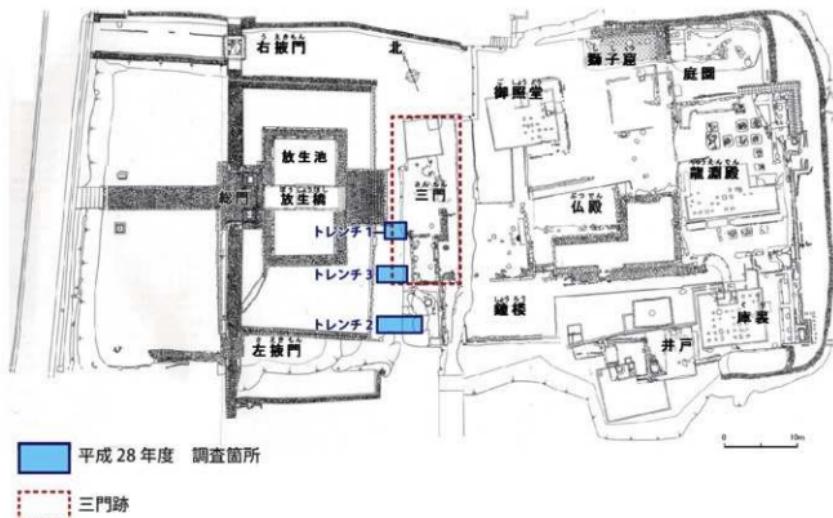
トレンチ1では、三門の基壇の縁石と考えられる石列が検出されました。また、石列の片側には、塙^{せん}を數くための段が確認されました。

トレンチ2では、土留め遺構の検出を想定していましたが、ガラス片などの現代遺物が混じる攪乱^{かくらん}の土が続き、明確な遺構は確認されませんでした。

トレンチ3では、多くの瓦片がまとまって出土しました。三門は瓦葺^{かわらぶ}きの建物であったことより、これらは、瓦の葺き替えの際に廃棄されたものとも考えられます。

4.おわりに

今回の調査では、遺物の出土は僅かであり、遺構の構築時期等については明確にする事は出来ませんでした。今後は、過去に実施された調査成果と照らし合わせつつ、三門に関わる各遺構についてのさらなる検討を進めていく予定です。



第 1 図 平成 28 年度発掘調査実施箇所



図版 1 三門地区 遺構検出状況（南東から撮影）



図版2 三門地区 遺構検出状況（東から撮影）



図版3 トレンチ1 石列（北東から撮影）



図版4 トレンチ2 (北東から撮影)



図版5 トレンチ3 検出された瓦片 (東から撮影)

なかぐすくうどぅん 県営首里城公園内 中城御殿跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

専門員 田村 兼

事業名：首里城公園発掘調査

所在地：那覇市首里大中町1丁目1番地

時代：グスク時代～近代

調査面積：約130m²

調査期間：平成28（2016）年10月12日～11月11日

1.はじめに

中城御殿跡の発掘調査は、県営首里城公園整備を目的として、平成19（2007）年度より遺構確認調査が開始され、これまでに石造の側溝や石垣、石積み、階段、庭園の池などの遺構が良好な状態で残されていることがわかっています。

平成28（2016）年度は昨年度に引き続き、敷地内北西部の上之御殿と呼ばれる地区を対象に調査を実施しました。

2.中城御殿の概要

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として、現在の首里高等学校敷地内に創建されました。明治3（1870）年に、大中町に新御殿の造営が開始され、明治8（1875）年に移転します。そして、明治12（1879）年の琉球王国の崩壊を経て、昭和20（1945）年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地に存在していました。戦後は一時、引揚者たちのバラックが建てられ、のちに首里市役所、首里バス会社の敷地として使用されました。昭和40（1965）年に琉球政府により敷地が買い取られ、琉球政府立博物館の建物が新築されました。その後、博物館は昭和47（1972）年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称され、平成21（2009）年に解体されるまで存在していました。



中城御殿跡位置図



平成28年度調査箇所（写真下が南）

3. 調査の成果

上之御殿と呼ばれる地区では、平屋の建物を中心に南側には庭園、東側には御蔵が配置されていたとされます。平成 28 年度の調査では、調査区を 2 か所設置し、^{たご} 庭園と、中城御殿の周縁を囲む石牆の遺構を確認するための遺構確認調査を行いました。

トレンチ 1 では、平成 27 年度の調査で見つかった庭園遺構の続き西側部分と、庭園遺構につながる石列を確認しました。石列は南北の外縁に走る石牆と並行して延びており、サブトレンチにて堆積状況を確認したところ、中城御殿当時の造成層直上に積まれることが確認できました。これらのことから、石列は南北の石牆の内側にある可能性が考えられます。

遺物については、庭園遺構の客土から、瓦、沖縄産、本土産の陶磁器類、釘などの金属製品類などが出土しました。

トレンチ 2 では重機による掘削を行いましたが、戦後から現代にかけての造成層が堆積しており、石牆の北側部分を確認することはできませんでした。石牆は、調査箇所より東側に存在する可能性が考えられます。

これらの調査成果については今後詳細な整理検討を行い、上之御殿地区の全体像を明らかにするための資料としていく予定です。また、平成 29 年度はトレンチ 1 で検出された石列の延長部分の調査を行う予定となっています。



トレンチ 1 全景（北西から撮影）



トレンチ1 石列検出状況（北から撮影）



トレンチ1 石列堆積状況（東から撮影）

県営首里城公園内 真珠道跡

沖縄県立埋蔵文化財センター

主任 宮城 淳一

目的：遺構の範囲確認調査

所在地：那覇市真和志町1丁目7番1地先

時代：グスク時代～近代

調査面積：約 71m²

調査期間：平成 28（2016）年 8月 1日～10月 31 日

1.はじめに

沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成 28（2016）年に「真珠道跡」の発掘調査を実施しました。今回の調査では、戦前まであった真珠道の跡とこれに隣接する国王頌徳碑の範囲・状況を確認することを目的としています。この調査成果は今後の首里城公園の整備のための基礎資料となります。

2.真珠道について

真珠道は尚真王代（1477～1527）に首里王府によって整備された道です。真珠道は石敷きで、当初は首里から真玉橋（現在の豊見城市）までの約 4 km が整備されましたが、その後 1553 年には那覇港（現在の住吉町）まで延長され、約 8 km の石畳が続いていました。

真珠道が整備された理由は、当時東アジア各地で猛威を振るっていた倭寇への対策だったとされています。尚真王は那覇港に倭寇が来襲した際には兵を派遣し、南風原、豊見城の真玉橋を通り那覇港の南側（垣花）へ向かわせたと真珠湊碑文に記されています。

3.国王頌徳碑について

国王頌徳碑（建立 1522 年）は尚真王の功績が記された石碑で、真珠道の東側にあったことから石門之東之碑文とも呼ばれていました。碑文には尚真王の功績として、それまで 100 年以上続いていた国王が亡くなった際の殉死を禁じるなど仁政を施したことが記されています。



国王頌徳碑（左）と真珠湊碑（右）

（現在は、復元された碑が首里杜館の前に設置されている）

4. 調査の成果

調査の結果、当初調査区の東側で確認できると想定していた国王頌徳碑と石碑を囲う石積みは、戦後の造成時に壊されており、これらに伴う遺構は確認できませんでした（○部分）。

この他、今回新たに溝状遺構を検出しました。溝状遺構も戦後の造成による影響を受けており、石積みの一部が外され水道管が通されていますが、地山に切り石を2段積み上げる様子や堆積の状況から当時は蓋石があった可能性があることが判りました（○が外された箇所）。遺構の傾斜の様子から、溝状遺構は南からカーブして東へ流れる暗渠であったと思われます。

また真珠道跡に関する遺構として石列遺構を検出しました。検出したのは真珠道の東側にあったとされる石牆の根石部分と考えられますが、その上の石積みは戦後の造成による影響を受けており確認できませんでした。

5.まとめ

今回の調査では戦後の造成により当初想定していた国王頌徳碑に伴う遺構を確認することができませんでしたが、南から東に向かって延びる溝状遺構、真珠道跡に伴う石牆の一部を確認することができました。これらの遺構の詳細については、今後遺物や堆積状況を整理し検討を行い、真珠道跡及び国王頌徳碑の復元の基礎資料としていく予定です。



調査区遠景（写真下が南）

溝状遺構

切石が2段に積まれており、南から東への地形に沿って傾斜しています。
この溝状遺構は堆積の状況から西側は蓋が設置された暗渠だつたと考えられます。



国指定史跡円覚寺跡へ→

真珠・淡路に伴う遺構
過去の調査では真珠・淡路に伴う遺構が設置されていたいた基壇部
分やこれを囲う石垣み跡等が確認されています。



石列遺構

基壇層であるクチャを組み込み、石灰岩の壁が埋め込まれています。この石列は真珠道の西側に設置されていた石組みの礎石とみえられます。



真珠・淡路に伴う遺構
過去の調査では真珠・淡路に伴う遺構が設置されています。



旧キャンプ瑞慶覧 西普天間住宅地区 試掘・確認調査

沖縄県立埋蔵文化財センター

専門員 南 勇輔

目的：遺跡範囲確認調査 所在地：宜野湾市西普天間住宅地区（旧キャンプ瑞慶覧）

時代：グスク時代～近代

調査期間：平成 28（2016）年 7月 1日～9月 4日（試掘調査）

同年 9月 5日～12月 8日（確認調査）

調査面積：（試掘調査） 試掘坑 40 力所（計：381m²）、（確認調査） トレンチ 4 か所（計：483m²）

1.はじめに

平成 27 年 3 月 31 日に返還された旧キャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区では、平成 26 年度から宜野湾市教育委員会が跡地利用に伴う文化財の適切な保護・活用のため、遺跡の性格や範囲を把握することを目的として試掘調査を開始しました。当該地区は範囲が広大であることから、宜野湾市教育委員会から協力要請を受け、沖縄県教育委員会は平成 27 年度から基地内にある遺跡の範囲や性格を把握することを目的とした、基地内文化財分布調査の一環として当該地区的調査を開始しました。

2. 平成 28 年度の調査について

平成 28 年度は、西普天間住宅地区の西側にあたる喜友名泉周辺の綠地で調査を行いました。

この一帯では、宜野湾市教育委員会によって喜友名下原第一遺跡、喜友名下原第二遺跡、喜友名山川原第三遺跡、喜友名山川原第七遺跡、喜友名西原遺跡、喜友名古水田跡が確認されていました。

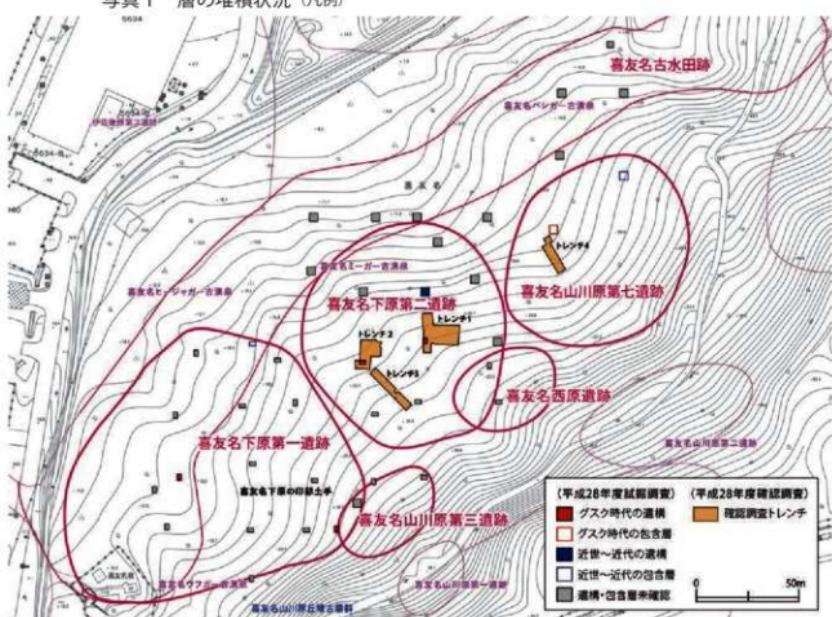
昨年度は、これらの遺跡の範囲や詳しい遺跡の内容を把握するため、試掘調査及び遺跡の範囲確認調査を実施しました。その結果、下記のような成果が得られました。



図 1 西普天間住宅地区と調査実施箇所の位置 (google map より引用)

3. 調査成果

調査の結果、喜友名下原第一遺跡、喜友名下原第二遺跡、喜友名山川原第三遺跡、喜友名山川原第七遺跡の範囲内やその周辺の試掘坑で、近世・近代からグスク時代にかけての遺物や遺構が見つかりました。特に、斜面地の中でも平坦面で近世～近代の溝跡やグスク時代の建物の柱跡が確認されたことから、こういった平坦面を利用して人々の生活が営まれていたことが伺えました。



【各遺跡の調査成果】

以下では、今回の調査の中でも顕著な成果が得られた喜友名下原第一遺跡、喜友名下原第二遺跡、喜友名山川原第七遺跡について紹介します。

喜友名下原第一遺跡

試掘によって近世～近代の旧耕作土と考えられる層やグスク時代と考えられる建物の柱跡が確認されました。また、近世～近代の耕作土層からグスク時代の青磁や白磁が出土した試掘坑も認められました。



写真2 建物の柱跡

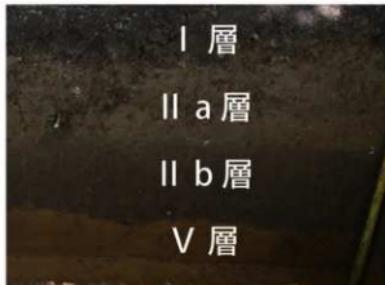


写真3 層の堆積状況

喜友名下原第二遺跡

試掘調査によって、近世～近代の溝跡やグスク時代の建物の柱跡が確認されたことから確認調査を実施したところ、グスク時代を中心にして近世～近代にかけての遺物や遺構が確認されました。

特にグスク時代の成果としては、炉跡や県内でも類例が少ない円弧状の遺構、柱跡内に土器がまとまって廃棄された状況が確認され、大きな成果を得ることができました。



写真4 建物の柱跡（トレンチ1）



写真5 円弧状の遺構（トレンチ2）



写真6 柱穴内への土器廃棄状況（トレンチ1）



写真7 炉跡（トレンチ1）

喜友名山川原第七遺跡

試掘調査及び確認調査によって、近世～近代の耕作土層とグスク時代が斜面側に厚く堆積している状況が認められました。また、当遺跡内に設定したトレンチ4では、グスク時代の包含層とともに近世～近代の溝跡が検出されました。



写真8 トレンチ4



写真9 旧耕作土層からの遺物出土状況



写真10 近世～近代の溝状遺構

4. 今後の計画

平成29年度は、平成27・28年度に沖縄県が実施した試掘・確認調査で得られた調査成果を整理し、本年度内に調査報告書を刊行する予定です。

大嶺村跡

(那覇空港管制塔新築工事等に伴う発掘調査)

沖縄県立埋蔵文化財センター

主任 大堀 翔平

目的：那覇空港管制塔新築 及び ケーブルダクト設置に伴う記録保存調査

所在地：那覇市小禄大字大嶺（那覇空港内） 時代：近世～近代

調査期間：平成 28（2016）年 3月 1日～7月 20日 調査面積：約 3000m²

1. 発掘調査の目的

那覇空港について 那覇空港は、沖縄県の空の玄関口として、人と物資について県内外・国外を結んでいます。国内でも利用度が高く、近年は需要に対応し切れない状況となっています。そのため、今後の需要拡大等へ対応するため、新たな滑走路を新設することになりました。

発掘調査に至る経緯 滑走路の新設に伴って、これに対応する管制塔やそのパイプラインなども合せて工事することになりました。これらの工事箇所は、事前に那覇市市民文化部文化財課が調査を行った結果、地中に「大嶺村跡」という遺跡（埋蔵文化財）が残っていることが分かっています。そのため、大阪航空局・那覇市文化財課・沖縄県教育庁文化財課の間で協議を行い、沖縄県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行うことになりました。

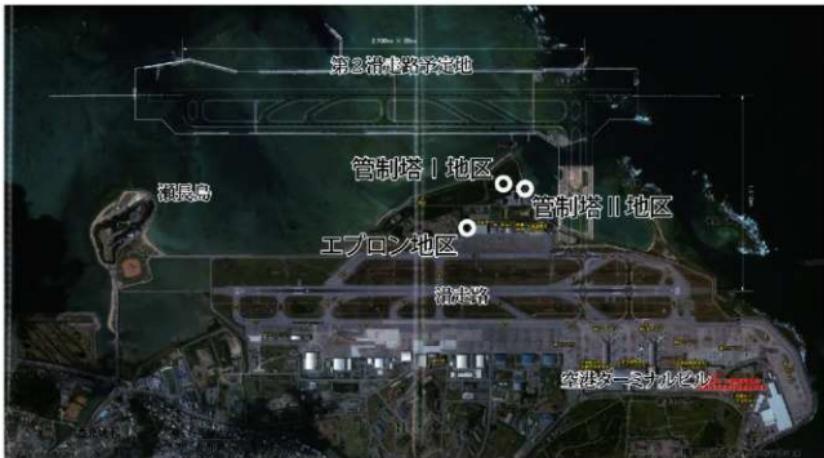


図1 発掘調査箇所

管制塔Ⅰ地区、同Ⅱ地区、エプロン地区で発掘調査を行った。面積は、合計約 3,000m²。

2. 大嶺村跡について

近世の記録 大嶺村跡は、近世（1609～1878年）の文献や地図にその名をみることができます。例えば尚敬の副冊封使として1719～20年まで8ヶ月琉球に滞在した徐葆光の『中山傳信錄』卷第四（1721年）には、大嶺については海辺にあってアダンの林があること、村の南に岩山があり絶景であることなどが記録されています。また、1750年頃に測量された琉球国惣繪図（間切図）にも大嶺村跡が描かれて、村の後背に馬場が書かれていることなどが注目されます。

近代 大嶺村は、明治になると小祿村字大嶺と改称されます。その後昭和6年から旧日本軍小祿飛行場が建設され、戦争の激化に伴って拡張工事が度々行われました。昭和20（1945）年の米軍占領後、大規模な改修を行って那覇飛行場となり、1972（昭和47）年の本土復帰後は那覇空港として現在も運用されています。



図2 琉球国惣繪図（間切図）に描かれた大嶺村
(沖縄県立博物館・美術館蔵) ○部分が大嶺村



図3 1945（昭和20）年1月航空写真に写る
大嶺村と小祿飛行場

3. 管制塔Ⅰ・Ⅱ地区の調査成果

管制塔Ⅰ地区 管制塔Ⅰ地区では、現代の地層を含めて4つの時期の地層が確認されました（図4）。そのうちで大嶺村跡の頃の遺構が見つかったのは一番下のV層からで、当時の溝跡や、ウマやブタ幼獣を埋葬したとみられる土壙が発見されました。特にウマは、体高が沖縄の在来馬より大きいため、近代に外国から持ち込まれた可能性が挙げられます。

また、Ⅲ層からは遺構は発見されませんでしたが、大嶺村の時期のものとみられる多量の遺物が出土しています。また、これら近世・近代の遺物のほかに、少量ですがグスク時代や先史時代の遺物もみられます。

図4 管制塔Ⅰ地区の地層堆積
 I層：現在の土（写真では省略）
 II層：那覇飛行場～那覇空港時代の造成
 III層：戦中・戦後直後の造成（1945年頃）
 V層：自然に堆積した海浜堆積物層
 （砂や貝殻・サンゴが混ざった砂層）

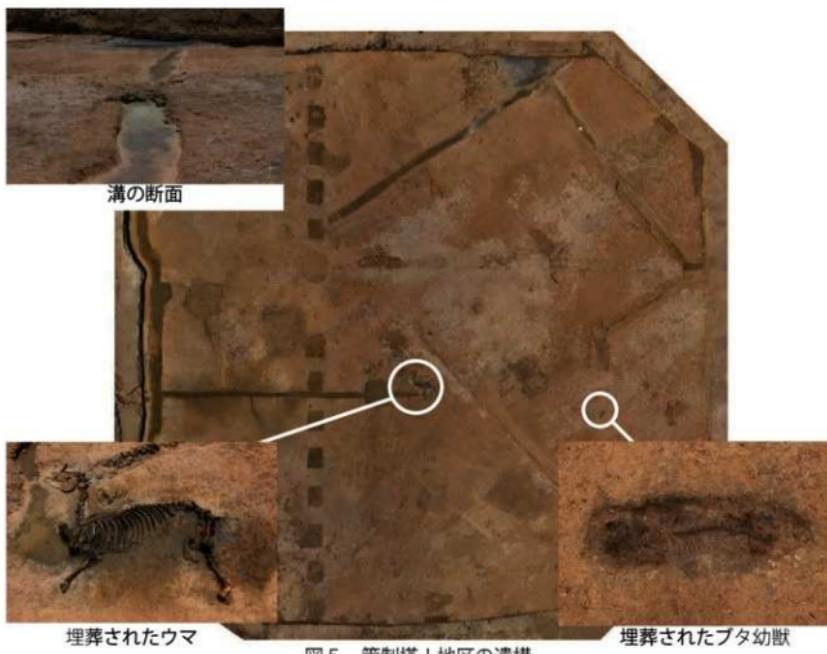


図5 管制塔Ⅰ地区の遺構

4つの溝によってほぼ方形を構成しているため、敷地等を区画する溝と考えられる。また、ウマ・ブタ埋葬土壌は、ほぼ動物が収まる程度の大きさに掘り込まれているが、ウマはIII層の造成によって左脚が欠損している。

管制塔Ⅱ地区 管制塔Ⅱ地区では、海拔約0mまで戦後から現代にかけての造成土が厚く堆積していました。その下には自然に堆積した海浜堆積物層や、琉球石灰岩が確認されました。この地区から遺構は確認されませんでしたが、造成土からは近世・近代の遺物が現代のものに混ざって出土しています。



4. エプロン地区の調査成果

エプロン地区ではⅠ層からVII層までの地層が確認されました。中でも、IV層とV層で多数の遺構が発見されています。



図6 エプロン地区的地層堆積

- I層：現在の表土
- II層：戦後の那覇空港の造成
- III層：戦中・戦後直後の造成（1945年頃）
- IV層：填圧された砂層
- V層：白砂層、海浜堆積物層（自然堆積）
- VI層：灰色化した海浜堆積物層（自然堆積）
- VII層：島尻泥岩層（自然堆積）

IV層からは柱穴などのピットを含めると100基以上の遺構が見つかりました。中でも井戸や遺物を廃棄した土坑などが注目されます。

井戸は3基発見されましたが、井戸1と井戸2は、井筒に使われた石材や構造などに共通点があります。また井筒の石材の中に近代の遺物が混ざっていたため、この時代に造られたことが分かります。それに対して井戸3は、廃棄穴の下にあったことに加え、石材の構造は井戸1・2と異なることから、これらの井戸より古い時代に作られた（おそらく近世）ことを窺わせます。

廃棄穴は、近代の頃の陶磁器をはじめ、動物骨や貝殻などが多く量に入っていました。出土した陶磁器は接合するとかなり本来の形に近いところまで接合することができます。この遺構からは、大嶺村の時代の道具の種類や、当時食べていたものなどを教えてくれる重要な発見です。

かまど?1



図7 エプロン地区の遺構

北側に多くの遺構が発見されている。特に井戸は約500m内に3基発見されている点が注目される。



図8 井戸1・2

上：井戸1 下：井戸2 (ともに左が検出時、右は半分に断ち割った状況)



図9 井戸3
最下層の井筒石材のみ残存。石材が井筒の形にカーブして作られている点が井戸1・2と異なる。



図10 廃棄穴（遺物廃棄土坑）
穴を掘り、そこに陶磁器や動物の骨・貝殻など廃棄したとみられる。
当時の陶磁器の種類や食べ物などが分かる重要な遺構である。

5. 出土した遺物

大嶺村跡からは様々な遺物が出土しています。大嶺村が営まれていた近世・近代の遺物が中心ですが、それより前のグスク時代や弥生～平安並行時代の遺物も発見されています。このことから、大嶺村が営まれるより以前から人が暮らしていたことが窺えます。



図11 近世・近代以前の遺物
左：中国産の青磁磁器（グスク時代）
右：土器の底部（弥生～平安並行時代）

移動展のお知らせ



石垣島
9.1 金 - 9.10 日
石垣市立八重山博物館

共催：石垣市教育委員会

波照間島
9.15 金 - 9.17 日
竹富町立波照間島公民館

共催：竹富町教育委員会

移動展 2017

- 両館ともに
- 9:00 ~ 17:00
- ※入館は16時半まで
- 入館無料

関連文化講座 <予約不要・参加無料> 先着 200 名

『下田原貝塚の調査について』

講師：金城 龜信

(沖縄県立埋蔵文化財センター所長)

会場：波照間農村集落センター

日時：平成 29 年 9 月 16 日 (土)

19:00 ~



主催 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL : 098-835-8751

速報展開速

第70回文化講座

発掘調査速報 2017

会場：当センター研修室 予約不要・参加無料

8/12 (土) 13:30 ~ 16:00 (13:00 開場)

- 白保竿根田原洞穴遺跡〔石垣市〕
- 蔵地洞穴遺跡〔うるま市〕
- ツヅビスキアブ〔宮古島市〕

巡回速報展

in 恩納村博物館

2018年 1/16 (火) ~ 2/4 (日)

in 宮古島市総合博物館

2018年 2/16 (金) ~ 2/25 (日)

企画展のご案内

沖縄の先史時代展 (仮題)

2017年 10/24 (火) ~ 11/26 (日)

首里城京の内跡出土品展

2018年 2/20 (火) ~ 5/13 (日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7 TEL: 098-835-8751

開所時間：午前 9時～午後 5時 (入所は午後 4時 30分まで)

休 所 日：月曜日、国民の祝日 (こどもの日、文化の日は開所)、年末年始、※月曜が祝日の際は、翌火曜も休所